

と型に嵌まったものではない。又、1. 諺語の(4)として掲げている Tamthil (加用引子的譬喩)に Lain dulang lain kaki, lain orang lain hati. (人心不同←盆が違えば脚も違うように人が違えば心も違う)を引用しているが、これは厳密に言って彼の説くように第一句が「引子」で第二句が「叙述」ではない。第二句は第一句の単なる繰り返しに過ぎない(参照: Banyak orang banyak muka-nya. 十人十色)。次のような例をこそ掲げるべきであろう。Biar lambat, asal selamat. (急がば廻れ←ゆっくりやれば、安全), Tahu makan, tahu simpan. (食べ方を知る者は、保つ法を知る)

マライの韻文は、もっと大局的、有機的見地からの考察がなされねばならない。分類を行うのに性急になったため、その説得力が弱い感じの論であるが、試みとしては面白い。なお、散文も5種に分類しているが、大体同じことがいえる。(崎山 理)

Elinor C. Horne: *Beginning Javanese*. Yale University Press, New Haven and London, 1961. xxiii + 560p.

Yale Linguistic Series として、今まで、Russian と Chinese とが出ていたが、表記のようにジャワ語がこれに加わった。本書はこの表題から想像されるような「初学者」のためだけの入門書では決してなく、ある程度のジャワ語の知識を持つものにも、大いに活用し得るだけの内容を備えている。この書を作るために相当数のインフォーマントを得て、正確を期したことが序文からも知れるし、内容の構成法も、最近、諸外国語の速成教育に適用されて相当の効果を示しつつある Language Laboratory (L. L.) 方式に従って述べられており、文法用語を中心としてそれを各項目に分け、説明するという従来の形式を全く採用していない。即ち、Lesson 1. WHO'S WHO, 2. WHAT'S WHAT, 3. DAILY ACTIVITIES...といった具合に、最初から会話でもって易から難へと進む仕組みになっているが、文法事項を調べるための索引も比較的良く作られてある。

ジャワ語には、周知の如く、やかましい敬語法があり、丁寧な用法を Krámá [krómɔ] (更に上流階級同志で用いるのを Krámá inggil), 卑近な用法を Ngoko と称え、ジャワ語学習者はまずこの難関にぶ

つかるのであるが、この書では各 Lesson を Section A, B と分け、同じ文例をそれぞれの用法によって示しているのも、これまでのこの点の説明に関してとかく難渋の多かった文法書に比べて、強調されて然るべきより良い試みといえるだろう。唯、欲をいえば、これを見開きの中に対照して収めればもっと利用し易かったらと思われる。なお、マライ・ポリネシア語全般にわたって tense の表し方がさほど厳しくなく、ジャワ語もその例に漏れないが、副詞の lagi が英語の-ing に当たるとして、Kowé lagi ora môtjô "you're not reading" のような例を示しつつ (p. 50, p. 427), Wông kuwi ora môtjô "That man isn't reading" (p. 317) の如き不統一を来たしているところもある。又、この著者は Locative forms という新しい項目を設定して、その中に受動形、能動形を分類しているが、その他にこれまでオランダ人によって "accidenteel Passief" と呼び習わされてきた k(e)...(an) をも含めさせている(マライ語にも同じ用法がある)。しかし、発生的にも機能的にもこれは本来の受動形とは異なる。Aku kélingan (←ilang) mugômugô. (Ng.) «私は希望を失った》。更に語根を名詞化する機能もある。kewarasan (←waras) «健康》。それ故に p. 437 に掲げられたこの項目の用法一覧表にも、k(e)...(an) は省いてあるが、元来、別に考察すべきものであろう。この用法は、発生的に自然界に存在する或る大きな力によって人間の無意識の内に引き起された行為を表現したと考えられ、その表現様式は今も残っている。

本書は、一貫して現在の日常会話を教えるのに目的があり、ジャワ文字など一切掲げていないし、又、それに伴うジャワ文学の例も殆んど載せられていない。これがこの大冊をして少々、物足りなさを感じさせる所以であるが、それを別にすれば、生きたジャワ語学書として推薦するに価する。(崎山 理)

E.C.J. Mohr & F.A. van Baren: *Tropical Soils. A Critical Study of Soil Genesis as Related to Climate, Rock and Vegetation*. Amsterdam, 1953. xiii + 473 + ix p.

共著者の一人 E. C. Mohr はオランダの土壌地質学者で、1905年から1920年にかけてバイテンゾルフ植物園の土壌地質研究所長として当時のオランダ領イン

ドネシアに滞在し、その後更に1930年にここを訪れて、『熱帯土壌一般殊に東印度の土壌』6巻を1932年に発刊している。戦後 Council of the Royal Tropical Institute, Amsterdam の委嘱をうけて、Utrecht 大学の土壌学教授 F. A. van Baren と共著したのが本書であり、その内容は、熱帯条件下での土壌生成が主要論点になっている。従って土壌の肥沃度、侵蝕、灌排水等の問題についての叙述は、それらが土壌生成に重要な関係をもってこない限り、省略されている。

内容は大別して2部から成る。第1部では熱帯条件下での土壌生成の一般論が展開されており、第2部で展開される土壌生成の個々の場合についての基礎的な側面を覆う。第1部では、気候(第1章, Atmospheric climate and soil climate), 母岩・造岩鉱物とその風化(第2, 3, 4章), 粘土鉱物の生成(第5章), 土壌中の鉱物組成(第6章), 器械的組成と土壌断面の特徴との連関(第7章), 有機物の形成と分解(第8章)がとり扱われている。第2部では熱帯での、殊にインドネシアでの土壌生成へ論旨が展開され(第9, 10, 11章), その他, Lateritic soils, Podzolic soils, Margalitic soils, Other important soil types, Classification of tropical soils についての各章が設けられている。

参考文献は今世紀初頭から1953のものに及び、必要なものは殆んど網羅されている感じである。Atmospheric climate and soil climate, Climate versus rocks, Clay mineral formation, Mineral association in soils, Lateritic soils, Margalitic soils. の各章の文献は充実している。景観、土壌断面、それに岩石の風化状態、土壌の生成の状況等を示す写真が豊富に収録され、記述を助けている。又各地の気象データ、(殊に雨量データ)、母岩、母材、粘土鉱物、土壌断面各層の化学組成を示すデータ、造岩鉱物の種類と量を示すデータ等がとくに目につく。ともかく、熱帯土壌学のこれ迄の業績と、それが現在かかえている問題を知るうえに又熱帯土壌を体系的に学ぶうえに貴重な本である。

土壌研究の場において、著者は一応、自然的概念の立場をとっているが、発想の基本においては、ヨーロッパ流の地質土壌学の傾向が強い。このことは J. van Baren の pedological credo: "In the beginning was the rock, and the rock was the

mother of the soils" に対する著者の強い共感の念として表わされている。著者が水田や畑作地等の土壌、いいかえると、外的因子として更に人為作用の加わってくる耕作地土壌を研究対象として選びたがらない、という姿勢がそこに出てくるように思われる。

土壌学が農業に何を寄与し得たか、又し得るか、という点から、著者が発刊を予告している次巻 *Tropical Soils and Crops* に大きな期待を寄せている。

(古川久雄)

Robert L. Pendleton: *Report to Accompany the Provisional Map of the Soils and Surface Rocks of the Kingdom of Siam*, Bangkok, 1953. Mimeograph. viii + 290p.

Robert L. Pendleton と彼にフィリッピンより同行した Sarat Montrakun は、1935年にタイ国に腰をすえて以来、タイ国の土壌及び岩石の調査に従事し、1946年に土壌図を発表。その後地方レベルでの精査を行い、採取された土壌の化学的・物理的分析、及び肥効試験を Sarot Montrakun が受けもち、漸時蓄積された結果を Mutual Security Agency へ提出する為にまとめたのがこの報告である。土壌分析結果は別に大部の報告書、*Compilation of Chemical Analysis of Soils in Thailand* に収録されている。

この報告書は次の五部から成る：

1. Limitation of the Soil Map, 2. An Annotated Soil Legend, 3. Soil and Fertilizer Studies in Siam, 4. Geographical Material, 5. Principal Topographic Subdivision of Siam. 重要なのは第二部、第五部の二つである。

第二部でタイ国の土壌を22の土壌型に分類し、その母材、地形、土性、植生、耕作形態等を主として述べている。Bangkok dark heavy clay, Ongkarak clay, Chiang Mai loam, Roi Et fine sandy loam 等重要な土壌型については、土壌断面に観察される顕著な現象中植物養分の存否、肥効テストの結果等に簡単に言及している。然し分類単位は soil series 程度のものや great soil group が並列され、又各単位のなかでの分類の区別がさだかでない場合も多い。著者自身、ここで使う土壌型には、その特徴に非常に大きな幅があることを了解してほしい旨述べている。